

図書室月報

2020年(令和2年)12月5日

第691号

柴崎友香著

『わたしがいなかった街で』

—くにたちブッククラブに参加して—



寺尾 彩子

今年の7月からくにたちブッククラブに参加するようになり、ました寺尾と申します。

私がこのブッククラブを知ったのは、国立市のホームページの最新情報ページでした。

丁度、石牟礼道子氏の『苦海浄土』を読んでいたこともあって、それに関連する講座に参加したいと考えていた矢先に新型コロナウイルスの影響を受け、講座が延期になってしまい、次に興味を持ったブッククラブの情報に辿り着き、試しに参加してみようかと考え、通いだして、今に至っています。

さて、私の自己紹介はこの辺りとして、ここからは10月の課題図書である柴崎友香氏の『わたしがいなかった街で』の感想を分かち合っていきます。私が最初にこの小説を読んだとき、「一体、この主人公は何を基準に自分の人生を生きようとしているのか?」といった全体像が見えてこないせいか、個人的には共感しにくい部分があったのですが、感想を話し終えた後の作品解説の中で、「主人公

が学生生活を送っていた1990年代頃はちょうど就職氷河期が始まった時期に当たるので、この世代の共通の特徴として、社会に対する無気力感を自分の内面に抱えている」という言葉を講師の先生から伺って、この小説の登場人物たちとあまり年齢が変わらない私自身から見ても、彼らが抱えている生きづらさや不安定感はこの時代の社会情勢が影響していたことを知り、物語への理解が更に深まりました。

私は過去にも読書会に参加してきましたが、くにたちブッククラブは一冊の本をただ読み合うだけではなく、専門家の先生方から物語が書かれた時の社会的状況やエピソードが聞ける点が大きな魅力ですし、また違う角度から作品を読み直す体験ができる場はそう多くはない、と感じます。その上、他の参加者の方々の感想を聞くと、「おつ、そう読んだか」「ここはまだ読み込みが足りないから、あとでじっくり読み返してみよう」等々、新たな気付きをくれます。

こんな学びの場を月に一度持つことは自分の人生を豊かにしてくれそうですし、コロナ禍の今、人々の生活に制限がかかっているからこそ、一冊の書物を通して、自分の立ち位置を見つめ直す時間が必要なのではないでしょうか?

考えてみれば、以前の私たちは合理性や効率を重視するあまり、大切にしなければいけない本質的なことをどこかに置いてきたのではないかと感じる感覚に捉われます。その反対に読書は非効率の作業の連続ですが、だからこそ、その中に大きな宝物が隠されている、と私は考えています。それは簡単に見つかりませんが、その宝を発見した時は自分の内面の成長を見出すことができそうですし、それはくにたちブッククラブに参加したことで得られたものです。

これからもこのブッククラブでの学びを通して、知への探究を続け、書物から多くの賜物を得ていきたい、と私は切に考えるのです。

ブッククラブから

西加奈子 著

色んな意味の込められた『i アイ』

中井あつし



「この世界にアイは存在しません。」という言葉から始まり、この小説の中でこのフレーズが二十六回繰り返し返される。読み進むうちに「アイ」には色んな意味が込められていることに気付く。冒頭の「アイ」は虚数の「i」だが、ある時は主人公のワイルド曾田アイ、ある時は「愛」、「相」、「哀」……。おそらく全部で十五ほどの意味を持っているように思った。

「i」の他の意味としては、字を人の形と見たてて、一人の人間、「d」の字の形から「昔前の女子高生言葉では「妊娠する」だったので、「i」は流産した状態。ヨウ素の元素記号「I」から福島原発事故での放射性ヨウ素への連想。internet、internationalなどが思い浮かぶ。

シリア生まれのアイは、アメリカ人の父と日本人の母の裕福な家庭の養子となり、ニューヨークではハイチ移民のシッターにも育てられ、中学から日本に転居する。

アイは世界で起きている内戦、事件、災害などの死者の数を黒い表紙のノートに書き留めている。アイの生まれた国はシリア。激しい内戦が長く続いている国だ。多くの難民が

国外に逃れている。アイがなぜ養子として渡米したのかその理由は書かれていないが、アイ自身が死者の一人として数えられていたかもしれないことを想像すると、世界の不均等と「どうして私じゃないんだろう」と「不当な幸せ」を感じずにはいられない。

「アイは存在しません」と言われた日本の高校でミナと親友になる。ミナは「I」の対句となる「皆」の意味でもあろうが、ミナ自身は同性愛指向。

東日本大震災後にアイは年上のカメラマンのユウと知り合い、「アイは存在する」と気持ちが変わっていく(ユウは「you」とこれも「I」の対句となる)。

しかし、それまでノートに書き留めるだけで、対岸の火事のような大人数の死も、体外受精で得た胎児が流産してしまうことで、「ずっと免れたと思っていた自分に起きた」悲劇に、再び「アイは存在しない」と思う。

この本は、四年ほど前に発売され、書店で平積みになっていた時、「i」とはどんな意味だろうと思った。そして、目を引いたのは西さん自身が描いたカバーイラストの「ア

イ」、目(eye)。読み手に強く訴えてくる強い眼力(めちから)を感じて、即買いた。初めてこの小説を読んだ時、アイが書き留めた数多くの死者、起きている事件、災害などから、想像することの大切さを感じた。「渦中の人しか苦しみを語ってはいけないなんてことはないと思う。(中略)渦中にいなくても、その人たちのことを思っ苦しいと思いを寄せることだと思おう。」というアイの思いが印象的だった。

西加奈子さんの読者層は若い人達が多い。この小説はアイの目を借りながら、読者に世界で起きていることへの目を開かせ、想像力(imagination)を働かせるきっかけとなつて欲しいと思つて書いたのではないだろうか。

新型コロナ禍で課題図書順番が変更になり、今回の作品は前回の『わたしがいなかった街で』(柴崎友香)と共通する、遠く離れた場所での悲しい出来事を想像するという主題だった。講師の紅野先生の指摘通り、今年テーマの「空間を超えて世界に向き合う文学」に相応しい作品だった。

<アンケートのおねがい> 今年印象に残った本は何ですか？



図書室月報では、毎年1月号で「今年印象に残った本」の特集をしています。ぜひご協力をおねがいします。しめきりは、12月10日(木)です。くわしくは、図書カウンターまでどうぞ。

公民館図書室 年末年始

休室のお知らせ

—休室期間—

12月28日(月)～1月4日(月)まで

公民館正面入口右側にある本の返却ポストは
12月28日(月)午後5時から
1月4日(月)午前9時まで使用できません。

新着図書から

LGBTQの子どもへの学校ソーシャルワーク

〈哲学 心理学 宗教〉

西田幾多郎生成する論理

氣多雅子(慶應義塾大学出版会) 121

ランスへの帰郷 デイディエ・エリボン(みすず書房) 135

〈歴史〉

日本人と山の宗教 菊地大樹(講談社) 163

冷戦 上・下 O.A. ウェスタッド(岩波書店) 209

隠された「戦争」 鎌倉英也(論創社) 210

日ソ戦争1945年8月 富田武(みすず書房) 210

戦争をいかに語り継ぐか 水島久光(NHK出版) 210

少女たちがみつめた長崎 渡辺考(書肆侃侃房) 210

ナチスに抗った障害者 岡典子(明石書店) 234

ジジ&ババの何とかかんとか! 100カ国制覇 風間草祐(牧歌舎東京本部) 290

〈社会科学〉

世界を動かすイスラエル 澤畑剛(NHK出版) 302

エリートたちの反撃 フォルカー・ヴァイス(新泉社) 311

イスラームからヨーロッパをみる 内藤正典(岩波書店) 316

白人ナショナリズム 渡辺靖(中央公論新社) 316

日韓の歴史問題をどう読み解くか 内海愛子(新日本出版社) 319

ベ平連とその時代 平井一臣(有志舎) 319

憲法9条再入門 前田朗(三一書房) 323

相模原事件・裁判傍聴記 雨宮処凛(太田出版) 326

NPOは何を変えてきたか 川崎あや(有信堂高文社) 335

「仕事映画」に学ぶキャリアデザイン 梅崎修(有斐閣) 366

女と文明 梅棹忠夫(中央公論新社) 367

「許せない」がやめられない 坂爪真吾(徳間書店) 368

福祉の旅路 川島美行(幻冬舎メディアコミュニケーションズ) 369

寺田千栄子(明石書店) 383

遠藤ケイ(山と溪谷社) 375

〈自然科学〉

日常の不思議を物理学で知る 松原隆彦(山と溪谷社) 420

自然散策が楽しくなる!日本の生きもの図鑑 成島悦雄監修(池田書店) 460

生き物の死にざま 稲垣栄洋(草思社) 481

だから、もう眠らせてほしい 西智弘(晶文社) 490

当事者研究 熊谷晋一郎(岩波書店) 493

人類と病 託摩佳代(中央公論新社) 498

〈工業〉

寡黙なる饒舌 若山滋(現代書館) 523

辰巳芳子ご飯と汁物 辰巳芳子(NHK出版) 596

〈産業〉

京都発・庭の歴史 今江秀史(世界思想社) 629

〈芸術〉

好日絵巻 森下典子(パルコエンタテインメント事業部) 791

〈言語〉

今そこにある多言語なニッポン 柿原武史編(くろしお出版) 802

「やさしい日本語」表現事典 庵功雄編著(丸善出版) 810

「国語」ってなんだろう 安田敏朗(清水書院) 810

〈文学〉

霧の彼方須賀敦子 若松英輔(集英社) 910

道行きや 伊藤比呂美(新潮社) 911

生かさず、殺さず 久坂部羊(朝日新聞出版) 912

百年と一日 柴崎友香(筑摩書房) 913

サキの忘れ物 津村記久子(新潮社) 914

ほんとうのリーダーのみつけかた 梨木香歩(岩波書店) 914

わたしに無害なひと チェウニョン(亜紀書房) 920

図書室のひろ

「学ぶことは生きること」

院内学級から考える、

子どもの学び



お話 副島 賢和(昭和大学)

ケガや病気で入院している子どものために設置された病院内の病弱・身体虚弱特別支援学級(院内学級)。

「病気の子ども」と聞くと、まずは治療に専念を……と思うかもしれませんが、副島さんは「子ども達がどんな状態であっても、学ぶことは生きること」であるといえます。入院生活という非日常の中に日常を淡々と用意し、子ども達は遊びや学びを通して治療に向かうエネルギーをためています。

院内学級で出会った子ども達、それを取り巻く大人たちのエピソードをご紹介いただきながら、人との関わり方が変化しているコロナ禍の今、子どもの学びの保障について考えます。

〈副島さんの本〉『はなれていても、だいじょうぶー今こそ伝えたい、院内学級で教員として学んだこと』(学研教育みらい) ほか

とき 1月28日(木)夜7時〜9時

ところ 公民館 地下ホール

定員 30名、オンライン受講30名(申込先着順)

申込先 12月10日(木)朝9時〜1月22日(金)

公民館 ☎(572)5141

図書室のついで

『面白くて』

眠れなくなる恐竜

お話 平山 廉

(古生物学者/早稲田大学国際学術院教授)

恐竜ってどんな生き物? 誰も見たことのない恐竜の真の姿を解き明かすべく、今日も恐竜の研究は発展し続けています。化石を手掛かりに、現在の生物と比較しながら恐竜について解き明かしていく様子は、まるで謎解きのように。

今回は、外観や生態、絶滅理由など、研究の進化とともに変化し続ける恐竜像について、また、そこから分かる私たち生物を取り巻く環境について、著者である平山さんにお話しいただきます。

〈平山さんの本〉表題作 (PHP研究所)、『新説恐竜学』(カンゼン)、『カメの来た道』(日本放送出版協会) ほか

とき 1月10日(日)

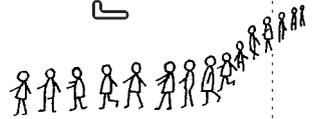
昼2時~4時

ところ 公民館 地下ホール

定員 40名(申込先着順)

申込先 12月17日(木)朝9時~

*発熱や体調の悪い方は、参加をご遠慮ください。また、マスクの着用をお願いします。

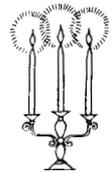


〈私の本棚から 第3回〉

村上龍著

『希望の国のエクソダス』

石井翔梧



「なぜ学校に行かなくてはならないのか?」という問い、誰しもが1度は直面することと思う。しかし、大多数の人間はそのまま学校に通い続けただろう。僕もそのうちの1人だ。何だかんだ楽しい思い出だってある。本作では、80万人の中学生が学校を捨てる。集団不登校を起した中学生の代表であるボンちゃん、国会で大人たちに吐き捨てる。「この国には何でもある。だが、希望だけがない。」さらに、学校は社会で生きていく為の術を教えてくれないと主張し、大人になる上で、誰の真似をすれば良いのか分からないのだと嘆く。彼の発言に共感する若者は多いのではないか。少なくとも僕は、「それな。」と思う。個人化や不安定化が進む社会の中で、学校から社会への移行が複雑多様・長期化していると言われる久しい。生きがい、承認、将来展望、つながり。変化する社会の中で、手に入れることが難しくなったことの総体こそ、ぼんちゃんと言う「希望」なのかもしれない。

な彼らのバイタリテイに脱帽すると同時に、ある問いも持った。それは、大人になる為に必要なことは、何らかのスキルを獲得することなのだろうか。職業や経済的自立のみに規定されるものなのか。大人になる為に必要なこと、必要な経験はもちろんだ、大人になることの妙味を考へることも大切なのではないか。大人だからこそ感じられる醍醐味を問うことこそ、この国で生きる上での「希望」について問うことにつながるのかもしれないと思ったりする。

20年前に執筆された本作だが、全く古さを感じないのは何故だろう。おそらく、経済危機により失業者や自殺者が増加している本作での日本の状況と、現在のコロナ禍での日本の状況がとても似通っているからだ。閉塞感や先の見えなき、不吉なことが進行しているのに何をどうすればよいのか分からない感じがそれだ。テレワークやオンライン授業が急速に普及し、働き方や学び方、ひいては、人々の関わり方そのものが問い直されようとしている。そんなこれからの社会を生きる上での「希望」とは何なのだろうか。

とは何なのだろうか。(文藝春秋)

くにたちブッククラブ

一空間を超えて世界と向きあう文学一

石川達三『生きていた兵隊』

(中公文庫)

講師 山岸 郁子

(日本大学・日本近代文学)

とき 12月10日(木) 夜7時半~9時半

定員 30名 (今年度申込済の方申込不要)

ところ 公民館 地下ホール
申込先 公民館 ☎(572)5141

*次回は1月7日(木)

小野正嗣

『九年前の祈り』

(講談社文庫)です。

